

葬式のOR

映画『お葬式』を観て

高橋 正子

「冠婚葬祭」この4文字ほど人間一生のイベントを表わすのに簡にして要を得た言葉はない。その中で最大を問うなら、少なくともわが国では一般人にとっては、葬——すなわち葬式との答えに異論はあるまい。その葬式を題材にした映画がある。伊丹十三シナリオ・監督による題もそのものズバリ『お葬式』。封切り以来、日ごろ映画館に足を運んだことのなさそうな中年カップルが客席を占めるという一種異様な人気で、1984年度のわが国各種映画賞をほぼ独占した。『お葬式』は伊丹氏が自身の体験を脚色・ドラマ化したものだそうで、主人公が、義父(妻の父)の急死で初めて主宰した葬式の顛末を、第1日目(死体の引き取り)、第2日目(通夜)、第3日目(葬儀)と順を追って描いている。ここではこの映画を材料に葬式における問題とその解決を主宰者の立場で考える。

さて、葬式とは字のごとく死人を葬るための儀式である。人間が死ぬとその死体は単なる物体とは看做されず、一定のルールにしたがって葬らなければならぬ。ここでは一応、死者の魂を鎮め生者に崇ることなく安らかに永眠させることを目的とする一連の手続きを葬式と呼ぶことにしよう。

葬式は、かつて存在した人間の数ほど行なわれてきた儀式にもかかわらず、当事者にとってこれほど難問の連続に直面するイベントも珍しい。式

の主宰者自身の経験不足は結婚式などでも同じだが、葬式には他に相違する難点がある。Xデーに向かって極秘裏に着々と準備を進めていると思われる国家規模の葬式もあるが、普通は何カ月も前からあらかじめ日時を決めて綿密な計画を立てることなど思いもよらぬ。死の瞬間からスタートして短時日でことを運ばねばならぬ。さらに故人の後継者たる主宰者の器量を示す重要な場として主宰者が表に立つ場合もなくはないが、本来の主役は主宰者ではない。いくら喪主が喪服美人であっても、それが表立って称えられはしない。主役はあくまでも故人というその場に存在せざる、したがって、その意向を尋ねることができぬ人間である。

さて、魂を鎮める目的を遂行するために人間は宗教による葬式システムを完成した。現在、葬儀の核心部分を宗教家に一任することで、われわれは葬式の目的を達成できる。ゆだねた部分は一般人にとってブラック・ボックスであってかまわぬ。日本人の大半が仏教徒であるかどうかは疑問であるが、葬式仏教なる言葉があるほどわが国では大半が仏教による葬儀を行なう。そして、幸いにもわれわれは葬儀のためにわずかな儀式手順を知っていればよく、お経を暗記しておく必要はない。『お葬式』においても仏教葬儀は既定路線なので以下はそれにならう。

各宗教において葬儀の形式が整うとともに複雑化し、確立すると、それにとまって葬儀に必要

たかはし まさこ 慶応義塾大学 理工学部

〒223 横浜市港北区日吉3-14-1

な道具立てを用意し終了にいたるまで儀式が円滑にすすむよう、その世話を専門に請け負う職業が出現した。葬儀屋である。葬儀屋は豊富な職業経験にもとづきすべてをマニュアル化し、それにしたがつて複雑な作業を短時間で完遂できるようにした。そこで葬儀屋を頼むとして、どの葬儀屋をとということも含めてまだ難問が残る。伊丹氏の列挙する問題（参考文献 292 ページ）のうち、当事者内の問題を除いてその解決法を見てみよう。

まず弔問客のお悔やみに答える作業や挨拶の仕方、焼香の仕方とその順序、喪主、親戚代表はいつどのように挨拶するか、お坊さんの迎え方、火葬場での作法、精進落しの正しいやり方。これらは一定の形式にのっとった答えがある。『お葬式』の主人公は焼香の仕方を息子に教え、坊さんの迎え方を葬儀屋に習い、そして挨拶の仕方を「冠婚葬祭入門」の本ならぬビデオ・テープを用いて練習するのである。ここまではほぼマニュアル化されている。このマニュアルたるやわが国においては一部の土地の風習を除いてほとんど全国共通であるのは考えてみれば凄い。であるからこそ『お葬式』も全国的大ヒットとなったのであろう。この映画自体が一種のハウ・ツー物と受けとられている向きもある。

一方、一律に決めかねる問題もある。葬儀をどこでですか、誰に知らせるか、どの葬儀社を頼むか、病院にある遺体をどうやって家へ運ぶか、家へ運んだらどの部屋へどう安置するか、葬儀委員長は誰に頼むか、受付や香典の管理は誰にやってもらうか、お坊さんはどこに頼むか、戒名はどうするか、さらに『お葬式』では省略されているが、お墓はどうするか、いつどのように納骨するか、これらは故人の遺志、遺族の要件、その他の外部環境をパラメータとして主宰者が意思決定を下さねばならぬ問題である。なかでも故人の遺志は重要で、それが明確であれば「故人の遺志により」で多くが解決する。そうでない場合は、故人に最も身近かった者が代弁者となる。『お葬式』では故人

のつれあいたる義母が故人だったらこう考えるであろうと意見を述べる。

また、普段壇家として寺との交流が密であればそれほど問題にならないかもしれぬが、現在少なくとも都会ではそのほうが稀であるので、お布施はいくらくらいが適当かというのも大問題である。『お葬式』では葬儀屋に尋ねたものの、「十万でも二十万でも…」との答えに「十万と二十万じゃ倍ですから…」と当惑するに至る。こういうときの「相場」ほどバラツキの大きなものはない。まして、お布施の額(インプット)とその効果たる読経等(アウトプット)との関係が測り難いとなれば、普段の情報収集に努めていないかぎり誰かの言いなりになるか、「あてずっぽう」のいずれかしかないのが現状である。

最後に、お金はいくらぐらい用意すればよいのか、食べ物や飲み物はどのくらい用意すればよいのかに代表される。どの程度の質の葬式にするか、どの程度の量の葬式になるかともなる数値予測を含んだ問題に触れよう。

質について『お葬式』では、高いか安いか見当もつかぬままに葬儀屋に「中の上」の棺桶を注文する場面に集約されている。「中」が平均値、中央値、最頻値のいずれを表わすのか不明であるが、筆者がかつて都内某葬儀社から祭壇カラー写真入りの郊外レストラン並みメニューによって説明を受けた経験からすると、「中の上」といわれるものが最頻値のようであった。

では、量たる列席者数を決定するパラメータは何か。それは、いつ、どこで葬儀を行なうか。また誰に知らせるか（新聞広告を出すか否か等）の条件下で、故人および遺族の人間関係（姻戚、交友関係、所属団体とそこでのポジション、現役か否か等）により決まるであろう。さらに、ここで集まる香典に見合った額の葬式を行なおうとするなら、量と質とは相互に密接に関連しあうことになる。『お葬式』のシナリオには、収支ほぼ均衡して、うまくいくもんなんだなあと感心する場面

(本編ではカットされた)があるが、もちろん、いつもそううまくゆくとはいえぬ。それはともかく、大葬儀ともなれば、列席者数により必要な道具立て、すなわち受付窓口数、手荷物預かりのスペース、焼香台の数なども決まってくるから、経験豊富な葬儀社であれば、ある程度の列席者数予測モデルをもっていて不思議はなからう。

以上、葬式においてわれわれは宗教、葬儀屋、それに各種ハウ・ツーものといったマニュアル化された結果のシステムを利用して問題解決を図る。しかし、こういったシステムがあつてなお、その主宰者となった時に悩まなければならぬこと

が多々あるのは『お葬式』にみられるとおりである。いざというとき狼狽しないためには、日頃、その葬儀の意思決定に関与しそうな身の回りの人物に関しては必要な情報はさり気なく、しかし正確に入手し、また自分の場合は、はっきりと意志表示すること。どんな立派な問題解決システムでも、パラメタのインプットが誤っている、正しい解は得られぬのであるから。

参 考 文 献

伊丹十三：『お葬式』日記、文芸春秋（1985）

ピラ作りにカラー・ペーパーを

模造紙にピラを書くのはなかなか骨がおれる。フェルト・ペンや筆を使って普段書きなれない大きな字を書かなければならない。大きい字はとかくアラが目だつものだ。字くばりもむずかしい。粗い格子がうすく印刷された模造紙に鉛筆で下書きをしておけば少しは楽だが、全体のバランス、図や式の明瞭さを保つのはかなり大変だ。それに、大きい紙だから書き損じないように注意しなければならない。書き損じれば、はじめから書きなおさないまでも、紙を貼ったり、書き損じた字がすけて見えないかを気にしたりして、作業もだんだん機嫌が悪くなる。

そんなことなら、はじめから別の紙に書いたものを貼りつけるほうが失敗がなくよい。レイアウトも容易だし、共同作業もやりやすい。タック・ペー

パーを使えばノリも要らない（大きいタック・ペーパーを売っている所は、出入りの印刷業者にでも訊ねてみるとよい）。図などの場合、色をぬって好みの形に切って貼りつければ、輪郭がはっきりして見やすい。色は、油性のフェルトペンで濃くぬりつぶせば、染めたようになる。

もっとよい色調が所望なら、本物のカラー・ペーパーを使うとよい。安い費用で意外な効果があげられる。

それにしても、大きな文字の印字できるワープロやパソコンの使いやすいソフトウェアは早く実現されないものだろうか？ せめて5cm 角の文字が印字できれば、後は複写機で拡大すればよいのだが。

(からくり堂主人)